ウィッチーズと独りきりのウィザード

八九寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウィッチーズと独りきりのウィザード

【Ｎコード】
Ｎ５０４５Ｚ

【作者名】
八九寺

【あらすじ】
ストライクウィッチーズの世界にオリ主がやってくるお話しです。本作は私が本サイトに投稿している『魔法少女リリカルなのは　～若草色の妖精～』の主人公「ジーク・アントワーク」の数年後の物語となっています。

本作品は、私のブログ「日々遊々」で連載されていたものに加筆修正をくわえ転載したものです。
その旨、ご了承ください。

プロローグ

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ

地球とよく似ているが魔力が存在するとある世界、１９３９年２月、突如世界各地に出没した正体・目的共に不明な異形の敵「ネウロイ」の圧倒的な戦力と瘴気の汚染による大陸侵略が進んでいた。

ネウロイは「瘴気」を撒き散らしながら進行するため、通常の人間では遠距離からの攻撃以外なす術がない。

大地を腐らせ金属を根こそぎ吸い尽くし、さらには金属や廃材などで兵器を生産、増殖を繰り返す。

侵略された土地は瘴気によって人が住めなくなるため、数々の国が滅ぼされた。

人類は唯一の希望として、魔道エンジンによる飛行脚「ストライカーユニット」を唯一駆ることの出来る魔力を持つ少女「魔女（ウィッチ）」による「機械化航空歩兵（ストライクウィッチーズ）」に望みを託しているのが現状だった。

その１年後の１９４０年２月、その世界に本来訪れるはずがなかった２人組の旅人が訪れた。

Ｓｉｄｅ．　Ｃｏｎｔｒｏｌｌｅｒ

～１９４０年２月１８日カールスラント南部空軍基地～

『本部より緊急通信です、シュトゥットガルト北部の町、カイザーベルグがネウロイの襲撃を受けています。ウィッチ隊は至急発進し、これを撃退してください。繰り返します―――』

Ｓｉｄｅ．Ｓｉｅｇ

虹色に輝いているトンネルのようなものの中を１機のＶＦ－１７１ＥＸカスタム　通称［ナイトメア？］が飛行していた。

そしてそのあまり広くなく、３人も入ったら身動きも出来ないような狭いコクピットの中に、１人の少年と、姿の見えない少女の声が響いていた。

少年の容姿は１０代前半、身長は１６０ｃｍくらいで、髪は烏羽色、長く伸ばした髪を後ろで括っていた。

「マスター、まもなく次の時空に到着します」

「了解。しかし今度の世界はどんな世界だろうね、イリア？」

少年は虚空に向かって語りかける。

「さぁ？　流石に着いてみなければ分かりません」

「それもそうだな、まぁとりあえず平和な世界だと良いけど」

その言葉を聞いてイリアが少し棘のある声で返答する。

「そうですね、着いた時に何か起こっていたらマスターはまた危険なことだろうと介入するんでしょうから」

少年はそんな少女の声に含まれる怒りに対して、苦笑いしながら返す。

「そりゃあ目の前で怪我をしていたり、よくわからない謎の生物に襲われてたりしていれば助けるのは当然じゃないか」

「やめてよ！　危ないから！！　見てるこっちの身になって！」

「いや、だって着いた場所で絶対何かが起こってるんだから仕方ないじゃない？　そのおかげで現地の人と知り合って仲良くなれたこともあったんだし、それになによりそのおかげでイリアにも出会えたんだから」

それを聞いてイリアのそれまでの口調が崩れた。

「……ジーク、そういうことを真顔で言わないでよ…恥ずかしいから…」

姿は見えないが、声から照れているのは一目瞭然だ。

「…何か恥ずかしいこと言ったか？」

「…分からないならそれでいいもん」

「なんで急に機嫌が悪くなる？　……まぁいいや、イリア、操縦中なんだから、公私を分けた話し方をしなさい。……まぁそんなことだから、次の世界に着いた時もそれは変えないさ」

しぶしぶといった感じで、イリアが口調を戻す。

「は～い、分かりました。コホン……マスター、あと３０秒で到着します、何が起こるのか分からないので護身用の武器くらい準備をしておいてください」

「了解、こっちはいつでも大丈夫だよ。イリアこそ準備の方は大丈夫？」

「いきなり戦場に到着したとしても大丈夫です」

毎回、到着していた先で問題に巻き込まれるのは日常茶飯事なので、対策は常に万全だ。

というか、その問題に巻き込まれる体質をどうにか出来ていたら、苦労は無い。

「……出来ればそうじゃないと良いんだけどね。」

行く先々で、問題に巻き込まれている自覚があるジークとしては、声に力がこもらない。

ジークの悲嘆をスルーして、イリアが到着までの秒読み＞カウントダウン＜を開始する。

「…到着までのカウントダウンを開始します、５…、４…、３…、２…、１…、ゼロ」

カウントダウンが『ゼロ』になったその瞬間、眼もくらむような白い光が一瞬だけジーク達の乗っている機体を包んだ。

◇◇◇

「…無事到着しました。対閃光用遮光シャッターを解除します。……っ！　…これはっ…」

「…街が燃えている。一体何が…？」

コックピットの外に広がるのは、空襲を受けたかのように燃える街の光景。

時間は夜のはずなのに、燃え盛る炎で空が紅く染まっていた。

「！！　…マスター！　２時の方向、距離２０００に、街に攻撃を加えている飛行物体を確認しました。生命反応は見受けられないので無人機だと思われます」

「この地を守っている軍隊のようなものは確認できるか？」

ジーク自身も、コックピット内の機材を使用して、周囲の状況収集を開始する。

「いいえ、今現在確認できていません」

「…イリア、街の被害状況は？」

心の中での焦りは隠しながら、何処までも冷静に二人は現状を確認する。

「火の手が街の各地で上がっており、街の7割に延焼しています。また、逃げ遅れた人々が多数いるようです」

その言葉に、ジークは『ギリ……』と奥歯をかみ締める。

「…イリア、ナイトメア？の武装の使用を許可、その攻撃をしている飛行体を破壊または撃退する」

ジークの脳内によみがえる、自身の生まれ故郷の滅びていく姿。この場において、どちらが蹂躙する側とされる側、どちらが正しいのかなど、ジークにはわからない。

だが、目の前で命が消えていくのは許せなかった。

6年前、滅び行くことを停められなかった故郷を、ジークは未だに忘れられていない。

「…マスターは？」

黙り込んでしまった自身の主＞あるじ＜を気遣うように、イリアが

声を上げる。

「ネメシスで外に出て救助活動を行う」

「…止めても無駄なんでしょうね。……外気に詳細不明の物質が混ざっています、…これは恐らく瘴気です。出る前に防護用の魔法を使用しておいてください。……　ジーク、無事に帰って来てくれるよね？」

イリアの恐怖が混じった懇願。最後だけ、口調が普段のものに戻ってしまう。

「……もちろん、情報ありがとう。……大丈夫、俺はちゃんと帰ってくる。……じゃ、行こうか」

「了解！」

そういうと、ジークは自らに防護用の魔法をかけ、キャノピーを開けると同時に空に飛び出したのだった。

プロローグ（後書き）

誤字脱字・原作との相違点などありましたらコメント欄にてご一報いただけると幸いです。

第１話　救助　約束　戦闘開始！！

Ｓｉｄｅ．Ｓｉｅｇ

「展開ッ！！」

ジークは外に飛び降りた瞬間に、腕時計によく似た魔法発動体を下に向けると、叫ぶ。
瞬間、発動体が発光し落下していく１０ｍほど先に、長方形の光り輝く門＞ゲート＜が現れた。

ジークがその門＞ゲート＜を通り抜けた途端、服装が変わり背部に飛行補助ユニット『ネメシス』を装備した格好に様変わりする。

ジークの髪の色が烏羽色から白銀色に変わっており、眼の色も碧色に変わっていた。

発動体から、『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ．』と機械音声が小さく告げる。
同時にジークは加速して逃げ遅れている人のサーチを開始した。

◇◇◇

「大丈夫ですか！！」

ジークは反応のあった一番近い場所に着くと、砂埃に塗＞まみ＜れてしまっているが、仕立てのよい背広を着た、怪我をしている壮年の男性を発見し声をかけた。

男性は火災の際に起こった爆発の際に飛んできたと思われる鉄パイプが腹部に刺さっていた。

「うぅ…、ウィッチ…か？」

男性が、閉じられていた眼を薄く開く。

顔には、迫る炎と痛みのせいか、汗がにじんでいた。

「？　…通りすがりの魔法使いです。そんなことよりも治療を！！」

ジークは男である自分を見てウィッチ（魔女）かと聴かれたことに疑問を覚えるが、直ぐにそんなことは水に流し治療を開始する。

同時にジークたちの頭上で、大きな炸裂音が響く。

「！？　…なんだ？　今の爆発音は？」

男性はまたどこかで何かが誘爆したのかとその音に過剰に反応した。

怪我をした体で、空を見回そうとする男性を、ジークは抑える。

「ああ、仲間が空の黒い飛行物体に攻撃を仕掛けた音だと思います。少し痛いですが我慢してください。……術式名『汝に光の加護と祝

福を』」

ジークが炸裂音の説明をしている間にも空から機関銃を撃つような音が聞こえてくる。

ジークは断りを入れた後に刺さっていた鉄パイプを抜くと、治癒魔法を発動した。発動すると、男性の体が光の薄い膜で包まれる。

男性のパイプが刺さっていたところに光が集まりだす。眼に見えて出血が止まり、ゆっくりとだが傷口はふさがり始めていた。

「……これでよし。このまま暫く安静にしていてください、この膜は障壁の役割も果たしていますし、酸素も供給されているので救助が来るまでこの中で回復をしながら待っていてください」

ジークは男性を安心させるよう笑いかけながら伝える。

「そうか…わかった、そういえば君の名前は？」

こわばらせていた身体を弛緩させた男性が、ジークに名前を尋ねてくる。

「？　…ジーク・アントワークです」

戸惑いながらもジークは自分の名を名乗った。

「（…名前から判断すると間違なく男だな、…なのに魔法を使用している？）助けてもらったのにお礼をいってなかったな。ジーク君、助けてくれてどうもありがとう。おかげで命拾いしたよ。それより

君はこれからどうするんだい？」

内心で、疑問の声を上げた男性だったが、この場で問答してもしょうがないとわかっていたのか、ジークに礼を言うと、これからについて尋ねてきた。

そんな問いかけに、ジークは当然のように宣言する。

「自分は街を周り、貴方のような人を救助して周るつもりです」

「そうか…」

男はそう言うと、少しの間黙った後に、着ていた背広から名刺ケースを出し、その中の名刺を1枚ジークに手渡す。

「私はアルベルト・バウムガルトと言う者だ、命を助けてもらったのにこの状況ではお礼を言うことしか出来ない、此所＞ここ＜での戦いが終わったら正式に御礼をさせてくれないか？」

ジークは名刺を受け取ると、少し考え、口を開く。

「…分かりました、近いうちに伺わせてもらいます」

好意を遠慮するのも申し訳ない。ジークはそんな気持ちから男性に頷き返した。

「ありがとう、受付でその名刺を見せてくれればいい。来る日が決まったら連絡してくれるとありがたい。……ああ、それといま空で戦っている、君の仲間も一緒に」

「分かりました、アルベルトさん。じゃあ自分は他の怪我人を救助しに行ってきます」

ジークは再度頷くと、ネメシスのウイングを広げ、再び空へと飛んで行った。

Ｓｉｄｅ．Ｉｒｉａ

ジークがアルベルトの治療を始める少し前、イリアの駆るナイトメア？も謎の飛行物体と接触した。

（飛行物体に接触するまで残り７秒、…マスターからの命令はこの飛行物体の破壊か撃退、しかし下手に破壊して墜落させてしまうと救助中のマスターに被害が及ぶ可能性がある。……ファイター形態で初撃を加えたのち、ガウォーク形態で周りを飛び回って撹乱しつつ砲口を破壊しつつ敵意をこちらに向けさせ、街から気を逸らさせましょう）

イリアは敵を観察しながら、戦術プランを構築する。この間実に０．２秒、イリアの優秀さが窺える。

……残りの６．８秒をこの戦いの後、ジークにどう甘えようか考えていなければだが…

（褒めてくれるかな？　褒めてくれるよね！　一緒にお菓子を作るのもいいけど、一緒に買い物に行くのもいいな～。はっ！これってデートっ！？　……どっちにしよ～）

イリアの葛藤は接近を知らせる警告音が鳴るまで続く。

（え！　ちょ！？　いつの間にかこんな近くにっ！？……ＰＰＢ［ピンポイントバリア］展開、これより攻撃に移る。Ｔａｒｇｅｔｌｏｃｋ　ｏｎ　……Ｆｉｒｅ！！）

敵の接近にようやく気付くと、飛行体下部のビームを発射している赤い部分を可能な限りロックオンし、マイクロミサイルでの攻撃を行うと、すぐにガウォーク形態に変形して周りを飛び回り、機銃＞ガンポッド＜による撹乱目的の攻撃を開始した。

第1話　救助　約束　戦闘開始！！（後書き）

誤字脱字・原作との相違点などありましたらコメント欄にてご一報いただけると幸いです。

第2話　焦燥　戦闘　クリス

Ｓｉｄｅ．　Ｇｅｒｔｒｕｄ

緊急出動の警報を聞いたとき私はすぐ動き出すことができなかった。

『カイザーベルグだと！？』

…シュトゥットゥガルドの北に位置する街など、何度考えても１つしか思い当たらない。

私の最愛の妹がいるあの街しか・・・。

そんな時に誰かが私の肩をつかんで揺り動かしながら何かを言っていることに気付いた。

「――――ルーデっ！！しっかりしてトゥルーデッ！！」

「ミーナ……か？」

私の肩を揺すっていたのは、上官であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ少佐だ。

この戦いが始まって以来の上官でもある

「ええ！！　攻撃を受けているのはあなたの妹さんが住んでいる街よ！　早く！！」

それを聴くと、半ば呆けていた私は格納庫へと走り出した。格納庫

へ到着すると、すぐにストライカーユニットを装着して飛び出そうとする。

「まちなさい！！」

「止めるなミーナっ、先行して足止めを――――」

「――――バルクホルン中尉！！」

ミーナの怒声が、格納庫に響いた。

「少し冷静になりなさい！そんな状態で言っても冷静な判断が下せるとは思えません」

「そうだよトゥルーデ。」

いつの間にか近くに来ていたハルトマンもその意見に賛成する。

「しかし――――」

私の反論をさえぎってミーナが口を開く。

「――――あなたが妹さんをとても大事にしていることは知っているわ。でもあなた一人が先行してもしょうがないの。他の皆の準備が終わるまで1分もかからないから、少しだけ待ちなさい、いいわね。」

ミーナの強い口調の命令を聞いて少し冷静になれた。

「……ミーナ、すまない、取り乱した。」

「分かってくれたならそれでいいわ、……みんな、急ぐわよ！」
格納庫のあちこちから、整備兵や他のウィッチが「了解」、「はいっ！」という返事が帰ってくる。

４５秒後、ウィッチ隊がネウロイ撃破のために発進した。

Ｓｉｄｅ．Ｏｕｔ…

Ｓｉｄｅ．　Ｉｒｉａ

（…下部のビームの発射口の７割が沈黙、ですが徐々に再生。攻撃がこちらに集中してきていますね）

イリアの作戦は目論見通りとなり、敵の攻撃は街にではなく、イリアの駆るナイトメア？に集中されていた。

しかし、敵の攻撃は変則的な機動をするナイトメア？を捉えることができず、ただ虚空を穿つのみ。

何発かは、まぐれでナイトメア？に着弾したが、事前に展開してあったＰＰＢ＞ピンポイントバリア＜によって完全に防がれていた。

（マスターのほうはどうなったんでしょうか。これ以上ダメージを与えてしまっては不味いのでは・・・）

ネウロイの表面は既にあちこちが欠けたり抉れたりしている。
再生速度も、最初の内より眼に見えて下がってきていた。
イリアが周りを飛び回りながら考えていると、ナイトメア?のレーダーが小型の飛行体が複数接近してくることを察知した。
望遠カメラでそれを捉えたイリアは、数瞬思考が停止する。
そして、主>あるじ<であるジークに指示を仰ごうと、通信をつないだのだった。
Ｓｉｄｅ．Ｏｕｔ…

Ｓｉｄｅ．　Ｓｉｅｇ

ジークはイリアからの通信を受け取ったとき、既に生存者を多数救助し、最後の一人の所へ向かっている最中だった。
いきなり腕の発動体からイリアの声が響く。
『マスター、報告したいことが……』
「うん？　なんだ？」
ネメシスで燃える街中を高速で飛びながらジークは聞いた。
『こちらに高速で近づいてくる小型の飛行体を複数確認しました。

この速度だと3分後には此処に到着します。多分この世界の軍隊だとは思うのですが…』

言い淀んでしまったイリアに疑問を覚えながら、ジークは先を促した。

「それが？」

『女の子達なんです。脚に小さなプロペラ機のような物を着けている……』

「はい？」

ジークはそれを聞き、イリアと同じように数瞬思考が停止した。

飛行操作を誤まり燃える建物に突っ込みそうになったが、寸前で回避する。

体勢を立て直すとイリアに聞き返した。

「えーっと、１つ確認。武器は持ってる？」

『はい、旧ドイツ陸軍のＭＧ４２らしき機関銃を持っています』

「…イリア、きっとこの世界ではそれが普通なんだよ、きっと」

ジークの記憶が正しければ、ＭＧ４２は女の子がもてるようなものではない。

だが、世界が違うだけで、常識が１８０度変わる可能性があることも、ジークはよく熟知している。

『…そういうものなんですか？』

度肝を抜かれるような経験の無いイリアは、まだその事実を信じられないようだった。

「取りあえず今飛んでいる奴に攻撃をしていれば、攻撃されることもないと思うから。所属や正体を聞かれたら、此処での戦いが終わったら話すと伝えておいて」

『了解しました』

「こっちもあと一人助ければ終わりだから、終わり次第そっちに向かうよ」

『分かりました。お気をつけて』

「ん。お互いに」

その言葉を最後に通信が切れる。

通信が切れるのとほぼ同時にジークは泣いている女の子を見つけた。

ジークは速度を上げ、そこまで飛んでいく。

「大丈夫？　何処か痛い？」

「うぅん・・・、避難してた時に、皆とはぐれちゃったの。・・・お兄さんは誰？　天使さん？」

女の子は眼のふちに涙を湛＞たた＜えながらも自分の状況を説明す

ると、ジークの背中のネメシスをみてそう聞いてきた。

確かに、ネメシスは天使の羽に見えないことも無い。

ジークは怪我がない事に安心すると同時に、天使と思われたことに苦笑して女の子に自己紹介をする。

「違うよ、そんな立派なもんじゃない。俺の名前はジーク、ジーク・アントワーク。君の名前は？」

「…クリス、クリスティアーネ・バルクホルン」

ジークの服の裾を掴み、上目遣いで少女は自分の名を告げる。

「そうか、クリスちゃんか、良い名前だね」

微笑みながらジークはそう言う。

しかし内心で、ジークは彼女をどうするか決めかねていた。

それはと言うと、これまで助けた怪我人は殆どが大人であり、少しいた子供も保護者が一緒に居たため、回復を兼ねた障壁に保護しておいて救助を待つ様に指示していたのだが、彼女は一人きりであり、いくら障壁が有ったとしても炎の海に置いて行ってしまうのは、まだ幼い彼女の精神に耐えられるかが不安だった。

最悪、トラウマを残しかねない。

ジークは本人に聞こうと口を開いた。

「……クリスちゃん、此処で一人で待っていられるかな？」
クリスはそれを聞くと怯え、また泣き出しそうになりながらジークに言った。
「この火の中で待ってなきゃダメなの？…恐い、ヤダ…」
ジークにとって予想通りの答え。
腕の発動体を使って、上空のイリアに連絡を取る。
「イリア、今から助けた子を一人そっちに連れて行きたいんだけど、キャノピーを開けられる？」
『可能です。マスターが私のところへ着いた時に、ＰＰＢをナイトメア？の上部に集中して展開しますので、その隙に中へ入れてください』
「了解。この子で助けられた人は最後だから、連れて行ったら俺も戦いに参加するから」
『分かりました。お待ちしています、では』
通信が切れるとクリスが不思議そうに聞いてくる。
「今の、だ～れ？」
「ん？　今、空であの黒いのを足止めしてくれている自分の大切な家族だよ」

「ジーク…さんは、あれがなんて名前だか知らないの？　ネウロイって言うんだよ？」

「…ネウロイ？　……うん、ちょっと理由があってね。……さっきの話は聞いたね？　今から向かうよ？　誰かが一緒で此処じゃなきゃ恐くないでしょ？」

「うん！」

クリスは涙を拭うと頷いた。

「それじゃあ行こう」

そういうとジークは燃え盛る炎により赤く染まった空へクリスをお姫様抱っこして飛び上がったのだった。

第3話　友達、驚愕、そして勝利ッ！

第３話　友達、驚愕、そして勝利ッ！

Ｓｉｄｅ．Ｓｉｅｇ

ジークは飛び上がると１０秒も掛からずにナイトメア？の元へ辿り着き、相対速度を合わせる。

ナイトメア？は、ネウロイのビームを余裕に避けられる場所までいったん離れて、ガウォーク形態で滑空して待機していた。

敵はこの機会に再生を試みているらしく、攻撃は止んでいる。

イリアはジークの接近を確認すると、ネウロイと逆方向に機首を向けて水平に機体を戻し、コクピット部にＰＰＢを集中してキャノピーを開けた。

それと同時にジークは抱いていたクリスをナイトメア？の後部席に座らせる。

『マスター、御無事で何よりです』

コクピット内にイリアの労いの声が響く。

「…誰も操縦して・・・・・・ない？」

クリスはコクピットに誰も座っていない事に気付き、ジークに尋ねる。

コックピットに姿は見えないのに、操縦桿だけが一人でに動いてい

る光景は、精神衛生上あまりよろしいものではない。

「…イリア、実体化してあげて」

『了解』

イリアが返事をするとコクピットの前部席に光の粒が集まりだす。その光が収まるとそこには妖精のように小さな女の子が半透明で空中に浮かんでいた。

「初めまして、私はイリアシオン、通称イリアです――――」

そこまで言うと、イリアは言葉を止めてジークの方にチラッと何かを頼むような視線を送る。

ジークはそれに気付き、苦笑しながら頷いた。

「――――よろしくねっ」

ジークが頷くのを見た瞬間、イリアはそれまでの口調から普段と同じ口調に戻す。

クリスはイリアを見て少し驚いていたが、直ぐに笑顔になった。

「こちらこそ、私はクリスティアーネ、クリスって呼んで」

「うん！　じゃあ私の事もイリアって呼んでね～」

二人？はお互い直ぐに打ち解けて話を始めた。

ジークはしばらくの間見ていたが、何時になっても終わらないので、少し悪いとは思いながらも二人の会話を停める。

「二人とも、話はあの…ネウロイ？　を破壊してからゆっくりと…な？」

「「は～い」」

二人は残念そうにしながらも素直に返事をした。

それを聞いてジークはこれからの動きの説明を始める。

「さて、今からあの敵……ネウロイに攻撃をかけて撃墜する。下の怪我人は治療中だけど障壁を張っているから、墜落させても平気。……イリア、ネウロイへの武器の効き具合は？」

ジークの問いにイリアは口調を改めて返答をする。

「マイクロミサイル、ガンポッド共にそれなりの効果があります。ミサイルの弾頭は通常のもの、焼夷弾、氷結弾などを試しましたが、どうやら魔導物質弾が最も効果があると思われます。また、敵の攻撃はビームのみ、ＰＰＢ＞ピンポイントバリア＜を単体では撃ち抜けませんが、あまり火線が１点集中されると抜かれる可能性があります。マスターの障壁や結界なら大丈夫でしょうが」

ジークはイリアの敵戦力調査に、満足する。

「ありがとう、ご苦労だった。…クリスちゃん、アレに弱点って有ったりする？」

ジークは一応この世界の住人であるクリスにも駄目もとで確認する。そんなジークの想定はいい意味で裏切られた。

「えーっとね、お姉ちゃんは軍で、いつもネウロイと戦ってるんだけど、ネウロイは体の何処かに紅く光るコアって呼ばれる物が有って、それを壊すと勝てるって言ってたよ」

「…そうか……わかった、ありがと」

ジークはクリスが弱点を知っているのにも驚いたが、それ以上に姉――それほど年が離れているわけでもないだろう――が戦っているという事に驚いていた。また、それと同時にやっぱりこっちに接近してるのは軍人なのか…、と自分の推測が当たったことを理解する。

「イリア、聞いての通り、これから攻撃を開始。どちらかがコアを発見したらもう一方に伝えて、コアを狙って集中攻撃でカタをつけよう」

「了解。クリス、シートベルトを締めて」

イリアはジークの作戦を聞くと、クリスにベルトを着けるよう指示をする。

ジークに手伝われながら、クリスはベルトを装着した。

「それじゃあ行くか」

ジークはそう言うと前部座席の下から、愛用しているＰ９０と、そのマガジンを幾つか取り出して装備する。

「了解」

イリアもそう言うと輪郭が揺らいで消え、再び姿が見えなくなった。

「クリスちゃん、ちょっとの間我慢してて、すぐに終わらせるから」

イリアの体が消えた事に目をぱちくりしているクリスの頭を撫でながら、ジークは言う。

「…うん！」

おとなしく撫でられながらクリスはジークに頷いた。

ジークは撫でている時に一瞬寒気を覚え、背筋を震わせた。

「…！？」

『…早く始めません？』

イリアが怒りを押し殺したような声でジークに攻撃の開始を促す。

明らかに今の殺気はイリアが発生元である。

「そ、そうだな。じゃ、行ってくる」

ジークはこれ以上此処にいるのは危険だと判断し、ネメシスを光らせるとあっと言う間に離れて行った。

後にクリスはこの時、初めて殺気を感じたと周囲に話すのだった。

Ｓｉｄｅ．Ｏｕｔ…

Ｓｉｄｅ．Ｇｅｒｔｒｕｄ

早く、早く、もっと早く！！

我々は１小隊（４機編隊）で街へと飛んでいた。

私が先行してしまいそうになるのミーナに何度も注意されつつ、私達は高速で街へと向かっていた。

頭の中は妹と故郷の事で一杯だった。

１０分程飛ぶと遠くの空が紅く染まり、ネウロイがビームを放つのが見えてくる。

「…おかしいわ、ビームが街にではなく空に向かって放たれている……」

先頭を飛ぶミーナが独り言のように呟く。

「あれ？　ホントだ？」

「そう言われてみると確かに…どういうことだ」

その呟きを聞き取ったハルトマンと私もそれに気付く。

「私が確認します」

ミーナとロッテ＞2人組＜を組んでいるシノーラが言う。
彼女は遠視の固有魔法を保持している。
この距離なら十分見えるはずだ。
彼女は海の向こうの隣国、『ブリタニア』のウィッチで、私達の基地に援軍として出向して来ていた。
「そうね、シノーラさん、お願い」
ミーナの声を聞くとシノーラが魔法を発動して視力を強化し確認をする。
数秒後、彼女の眼が戦場を把握した。
「ネウロイの周りを飛行している飛行体を2機確認――――」
そこで彼女は一旦言葉を止めて、もう一度確認してから、なんとも自信なさげな声で伝えてくる。
「――――……一機は戦闘機の様な物で、もう一機はおそらくウィッチ。所属は不明です。両者ともネウロイに攻撃を加え、かなりのダメージを与えている様です」
「どういうことだ？」
「？　…なぜ2つとも断定ではないの？」
一目瞭然のはずなのに断定ではなく、恐らくという答えかた。
シノーラの言葉に疑問を覚え、私と同様にミーナが聞き返す。

「それが…、……戦闘機の方がプロペラでは無くジェットで、更には脚が生えており、ウィッチの方が飛行脚＞ストライカーユニット＜では無く、背中の光る羽の様なモノで飛んでいるんです」

シノーラが自分でも信じられないという様に見たものを説明する。

その説明を聞いて私達3人にざわめきが走った。

「そんな、ありえないわ、ジェットエンジンはまだ構想段階のはずよ！？」

「そーだよ、ジェットエンジンが完成したなんてウルスラからも聞いてないし」

ミーナとエーリカが否定する。

「そうだ、開発に成功して「えっ！？　なんで！」…どうした？」

私が「開発に成功していれば――――」と続けようとするとシノーラが急に驚いたので、私はシノーラに話を振った。

「戦闘機に当たったビームが…無効化されました。」

自身が目にしたものが信じられないのか、シノーラが一度目を閉じ再度見直すがそれでも結果は変わらない。

「「「まさか！　ありえない（わ）！」」」

シノーラ以外の3人の声がユニゾンする。

「…皆、急ぎましょうか」

「ああ、そうしてくれ」

「分ったよ。気になるしね～」

「了解」

ミーナの問いに私達はそれぞれ賛成の意を示す。

私達は少しスピードを上げて飛行を続ける。

私達は現場に着いた時、さらに驚く事になるとはこの時全く思ってもいなかった。

Ｓｉｄｅ．Ｏｕｔ…

Ｓｉｄｅ．Ｓｉｅｇ

「…見つからないな」

ジークを加えて戦闘を再開して数分、ジークはビームを避けながら言った。

ネウロイはジークとイリアへの攻撃に、残っている使用可能な砲口をすべて使用している。

イリアはファイター形態で一撃離脱戦法＞ヒットアンドアウェイ＜、ジークはネウロイと一定の距離を保ちながら付きまとっての攻撃＞ドッグファイト＜を行っていた。

二人はその雨の様なビームを避けながらも確実に弾丸をネウロイに確実に叩き込んでいた。

『！！　ネウロイの中部にコアと思われる物を発見！』

発動体からイリアの声が聞こえる。

ジークもそれを聞き、イリアの攻撃した辺りに視線をむけた。

そこにあるのはイリアの攻撃により、ルビーのように紅く光るコアを露出させたネウロイの姿。

「うん、確認した。多分あれがコアだな。…どう破壊しようか」

コアの位置を知られてしまったからだろうか、まるで焦っているかの様にビームの発射間隔を速めたネウロイの攻撃を、先程までより鋭い機動をしながら、破壊方法を考える。

「…小回りの効く俺が囮になってビームを引付けて、イリアがトドメをさすのが一番現実的か？」

少し考えて、ジークはイリアに作戦を伝える。

『…そうですね、問題ないと思います。ネウロイの方も私の動きや速度を学習してきたようで、徐々に狙いが正確になってきています』

イリアも下手に自分が囮になり、攻撃が集中してはさすがのＰＰＢ＞ピンポイントバリア＜も不味いと思い、それに賛同する。

「よし、じゃあそれで行こう。…そういえばクリスちゃんは大丈夫？」

ジークはナイトメア？にクリスが乗ったまま高速飛行しており、空を初めて飛ぶクリスが気分を悪くしていないか気になってイリア越しに問う。

『うん、大丈夫。回りの景色がすごいスピードで流れて楽しいよ。』

発動体からクリスの元気そうな声が響く。

「平気なんだ…それならいいけど。…じゃあイリア、任せるよ。」

『了解、派手に決めて良いですよね？』

「…弾薬もタダじゃないから程々に」

内心何をするのか気が気ではなかったが、ジークはイリアに一任した。

『はい、では御気を付けて』

「了解、そっちも」

そう言うとジークは機体から離れ、ネウロイに近付くと、周りを旋回しながら、攻撃を引付け始めたのだった。

Ｓｉｄｅ．Ｏｕｔ…

Ｓｉｄｅ．Ｉｒｉａ

『クリス、派手にいっちゃうよ。準備は？』

口調をプライベート用に戻し、クリスに問う。

「いつでも良いよ！」

イリアの問いに笑顔で即答するクリスであった。

『よ～し、行くよ～！！』

そう言うとジークに攻撃が集中している事を確認すると、ネウロイと反対側に向いていた機首を反転し、コアに向けるとスピードを全開にして突撃する。

ネウロイも接近に気が付くと、イリアに向かってビームで迎撃を始めたが、機体を左右に傾けて避けながら、スピードを落とさずにそのままコアに直進した。

コアの少し手前で、ナイトメア？は一瞬にして人型のバトロイド形態に変形する。ＰＰＢを全面に集中展開しながら勢いをそのままに、右腕を引き右の拳から腕に掛けてをＰＰＢを集中させて包むと――

――

『イリア・ストレート――――』

技名を叫びながら――――

『――――パーンチッ！！』

――――コアを殴り砕いた。

そのままナイトメア？はネウロイを貫通する。

瞬間、ネウロイの体にひびが入ると、無数の白く光る破片となって、燃え盛る街へと落ちていった。

スペック的に問題は無いのだがマニュピュレーターに負荷がかかるので、あまりジークとしてはやってほしくない手段ではあることをイリアはすっかり忘れていたりする。

ともあれ、ネウロイに機首を向けてから僅か３０秒足らず。

作戦会議をしてから僅か3分の間の出来事だった。

「イリア　すごーい！！」

『ううん、それほどでも無いよ～』

言葉とは裏腹に、満更でも無さそうな声でイリアは答えたのだった。

おまけ

この二人の会話を聞いていたジークは、なんで生身のクリスちゃんは耐G服も着ないであのスピードで飛び、変形までしたのに意識を保っていられるんだ…？

この世界の人間が丈夫なのか、それともクリスちゃんが異常なのか…？

と結構真剣に考えていたりするのだった。

第3話　友達、驚愕、そして勝利ッ！（後書き）

こうやって昔書いた文を見直しながら修正していると「・・・読みにくいなぁ。それにいちいちくどいなぁ」と思ってしまう今日この頃です。
といっても現在上達しているかは微妙ですがw

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5045z/

ウィッチーズと独りきりのウィザード

2012年1月14日18時49分発行